

三水会会報

北里大学水産学部
同窓会会報
第 29 号

平成7年3月10日発行

編集者 大野 良 樹

発行 三水会（北里大学
水産学部同窓会）

事務局 〒246 神奈川県横浜市瀬
谷区瀬谷5-22-1石井方
☎ 045-303-3135

振替口座 第一勧業銀行
大手町支店
008-1182388

続・根室日誌（橘高 二郎）

若手研究者奨励金を授賞して（14F・坂本 節子）

山梨県水産技術センターに勤務して（11A・大森 洋治）

サッカー部の近況報告（水産学部4年 芝本 正樹）

16年ぶりの崎浜（3A 和田 光）

第22回漁火祭（漁火祭実行委員長 大隅光悟朗）

Information

※“三陸ツアー（Home Coming Day in SANRIKU）”のご案内



16年ぶりに三陸を訪問した
メンバーと女性職員の方々

平成6年12月2日、野付湾にて
中央・橘高先生

続・根室日誌

東京理科大学総合研究所
付属海洋生物研究施設
橋高 二郎

気温マイナス五度、積雪三センチ。根室のこの一月の平均的な冬を表わす数値である。三陸に較べると七度ぐらい低温、水道管は夜間凍るので水抜きが必要である。外は相変わらず北風が強いが、十八度にコントローラした室内では時に思い出したようにストーブが燃えている。一通りの自炊道具に、数冊の本、朝夕配達される地方紙、これが私の部屋に置かれているものの全てである。このように書くと、いかにも殺風景な印象



平成6年12月13日 卒業生と

を与えるかもしれないが三陸時代に較べるとよほど生活をエンジョイしている。住居が街の中であり、買物、食事等に不自由しないからであろう。明治の初期、根室は東京府に属していたが、一時期、札幌、函館と並んで根室県が置かれたこともある北海道の開拓の歴史を刻む町である。我が国で桜が最後に開花する土地は根室であるが、種類は本州の高地に咲く千島桜である。

しかし、その木は根室の土着ではなく、明治時代、国後島から移植された。これからもわかるように、我が国の海岸で平均気温の最も低い町は根室である。かつて屯田兵が入植したが、農業は全く振わず、代って地域を支えてきたのは、北太平洋およびオホーツク海の生物資源を対象とする水産業であった。

日本の沿岸からニシンが全く姿を消した今でも、近くの風蓮湖では春その産卵がある。秋、根室沖で獲れるサンマは日本一味が良いとされている。納沙布岬に近い研究施設の海

岸には、十二月ハタハタのさまざまの色の卵塊が打ち揚げられた。

三陸の水産的な土地柄を表現するきまり文句は「世界の三大漁場の一つ三陸沖」である。しかし、十年間の三陸生活でそれを実感したことは一度もなかった。正しくは「三陸はるか沖」と言うべきであろう。それに引きかえ、根室では毎日が海との新鮮な出会いである。この相違は何に由来するのであろうか。

第一には海との物理的とも言える親近感である。市内から研究施設まで二十五キロ、よく晴れ上った日には国後島、知床半島の山容を望みながら私の愛唱歌「青い山脈」を口ずさんでいるのにふと気付く。根室半島は言うならば八幡平のような高原が海面に降り、拡がっている気候、景観である。三陸の水産学部も臨海の研究施設であるが、水面上約七十メートルの断崖に位置するため海岸に降りるのは容易でない。

しかし、今の研究室は海面から高さ一メートル、歩いて数歩の所にある、四六時中、水の色、波の騒ぎを感ずることができる。今日の水温はすでに海面は広い範囲でシャーベツト状に凍り始めてきた。二月になると二面白い氷で覆われるであろう。

オホーツク海の流水が納沙布岬を回り太平洋に出るのはそれ以降である。

第二には海洋条件が水産生物の出現および豊凶に密着している事実である。オホーツク海と太平洋は千島列島の島々の間で通じているが、根室海域では知床、根室半島と国後島との間の根室海峡、国後島と択捉島との間の国後水道がその役割を担っている。根室海峡は知床側では水深二千メートルと深く、この海谷は北海道でも有数のスケソウダラの漁場として知られている。海峡は根室側では水深僅か二十メートルと浅くなり、水産的な生産力はあまり高くない。根室の漁船がロシアの管轄する海域で銃撃を受け拿捕されるのも、もともと日本側の資源が少ないという単純な事実の結果である。小林多喜二の「蟹工船」は大正、昭和初期の資本漁業の非人間的な側面を描いているが、その当時から北海道周辺よりもカムチャッカ半島沖にタラバガニ資源は豊富であった。

昨年十二月、余市町で開催された水産学会の時、小樽を訪れる機会があった。運河の周りは往時を今に残す観光の名所となっているが、ひそかに期待していた多喜二の名は駅前の書店の文庫本を除いて見出すこと

ができなかった。無理もない、彼の死は六十年以上も前の出来事である。それにしてもトラバガニの生物学はまだ判らないことが多すぎる。今、研究室では二日前からその孵化が始まり、飼育を開始したところである。

余市では川井唯史(増62)、上田重貴(増56)両君、小樽では渡辺宏君(増59)の活躍ぶりを知ることができた。帰途、札幌でアブルニョーザ・フェルナンド君(修士二年)と合流、その日は長谷川秀幸君(増52)から歓待を受けた。北海道は水産業が今なお盛んであるが、道東では、太平洋側の厚岸に中川亨(増56)、中川雅弘(増62)、オホーツク海側に船木康徳(増55)、近藤学(増53)、赤木秀樹(食58)の諸君がそれぞれ活躍している。根室には相川公洋、親子(旧姓北田)(増54)夫妻、佐藤敬二(食56)、山田和史(食4)、工藤良二(増55)、小野田進(増56)の諸君が健在である。個人名は省略するが、百二十名を超える三水会の方々が北海道全域で活躍しているのも心強い限りである。

(根室日誌は三月発行の水産学部だよりに寄稿しました。)

〈職場紹介〉

若手研究者奨励金を授賞して

14F 坂本 節子

水産衛生化学講座から水産資源化学講座へと名前が変わって五年目となる平成六年、水産資源化学講座に

とっては大きな変化の年となりました。この五年の間に村本光二先生が東北大学に移られ、後藤利奈先生が結婚退職されました。そして平成六年の春、私は水産生物化学講座で大学院を修了し、水産資源化学講座の助手に就任しました。同時にイリノイ大学から転任された酒井隆一先生が助教授に就任し、水産資源化学講

座に新たな風を吹き込んでいます。久々に三陸を訪れた方は講座の構成メンバーが大きく変化していることに驚かれたのではないのでしょうか。

水産資源化学講座では水産生物の生理活性物質を有効利用する基礎研究を行っています。水圏には陸上に劣らないほどの多種多様な生物が生息していますが、我々が利用しているのは主に食糧とするための魚介類や海藻といったほんの一部の生物を利用しているにすぎません。しかし、近年水産生物から陸上にはみられない特異な構造をもつ生理活性物質が分離され、水産生物は新たな生化学資源として見直されてきています。

生理活性物質と一口にいっても抗菌性物質、抗腫瘍性物質といった将来医薬品として役立つ可能性があるものから、毒性物質まで様々な活性を示すものがあります。現在、私はアオコを形成する藍藻 *Microcystis* 属のレクチン(凝集素)の研究をしています。レクチンはタンパク質あるいは糖タンパク質からなる生理活

性物質の一つで、細胞凝集や抗菌活性、毒性など多彩な生物活性を示すことが知られています。最初に分離されたのは植物種子のレクチンですが、現在ではウイルスからホ乳類に至る広範囲な生物群にレクチンが分布していることが報告されています。

水産生物においても魚類の卵や体表粘液、無脊椎動物の体液、海藻などからレクチンが分離され、その化学構造などの性状が徐々に明らかになってきました。現在、医薬品や生化学試薬として応用されているレクチンはあまりありませんが、将来この多様な水産資源から有用なレクチンが見つかることも期待されます。

アオコを形成する藍藻は夏になると各地の湖沼で発生し、分解にとんでもない悪臭の発生や水質汚染といった環境問題として取り上げられてきました。またアオコの中には *Microcystis* 属や *Anabaena* 属のように *microcystin*, *anatoxin* といった毒を産生する種も存在することから、公衆衛生上の問題にもなっています。しかし、そういったマイナスイメージのアオコから最近いくつかの新奇生理活性物質が分離され、未利用資源として注目され始めています。

藍藻のレクチンに関する研究はス



研究室忘年会 ————大沢温泉にて———
前列左端が著者、左から2番目が神谷先生
2列目左から3番目が酒井先生

ターゲットしたばかりです。これまでの研究ではアオコにレクチンがあることは報告されていますが、レクチンの生物活性や科学的性状に関する知見はほとんどありません。本研究ではアオコからレクチンを単離し、これらのことを明らかにしていきたいと考えています。また研究をしていく中でアオコのレクチン産生能は株によって大きく異なることがわかってきました。このことから藍藻におけるレクチンの生理機能にも迫ってみたいと考えています。

最後になりましたが、本年度この藍藻のレクチンに関する研究(有毒

〈職場紹介〉

山梨県水産技術センターに勤務して

11A 大森 洋治

山梨県水産技術センターは、昭和六年山梨県南都留郡忍野村忍草地内に県営忍野ふ化場として開設された。昭和四七年には、山梨県中巨摩郡敷島町牛勾地に魚苗センターを新設、忍野ふ化場も忍野養魚所と位置づけられた。平成五年、魚苗センターが水産技術センターに名称変更され、忍野養魚場も老朽化に伴い移転新設し、現在の水産技術センター忍野支

藍藻 *Microcystis aeruginosa* のレクチンに関する研究)で北里大学若手研究者奨励金を頂きました。実は当時、この研究奨励金への申請を一旦は諦めかけたのですが、神谷先生をはじめ数人の方にご指導ご鞭撻頂いてなんとか申請に至ったという経緯もあり、通知を頂いたときは信じられない気持ちでした。また私自身、研究者としてはまだ頼りない第一歩を踏み始めたところで、このような形で同窓会の方々に激励して頂き大変力強く思いました。この場を借りて先生方並びに三水会の皆様に厚く御礼申し上げます。

所となる。私の配慮されている忍野支所は、職員数七名(センター職員数は、県庁水産担当を含め二〇名)と東京科学大学の卒業学生二名で、富士の地下水を利用しニジマス等冷水性魚類の増養殖研究を主体に、高品質な種苗生産供給と養殖技術の普及指導を主な業務としている。

私の業務は、飼育魚の管理と生産業者への種苗供給、西湖・本栖湖の

ヒメマスの調査を主に行っている。現在、支所で飼育している魚種は、ニジマスを中心に一七種おり、日本には珍しいカットスロートトラウト・レイクトラウト・ホッキョクイワナ・アマゴのアルビノ、日本でも少なくなったイトウ・オシヨロコマ・ビワマスといった魚種も飼育している。種苗の供給については、支所が平成五年に移転しているため、種苗生産する採卵親魚の絶対数が少なく、親魚育成を中心に生産計画を進めている。現在は、ニジマスを中心に夏卵・冬卵併せて約一〇〇万粒を県内の業者に供給している。ヒメマスの調査については、西湖・本栖湖に年二回プランクトン・ヒメマスのサンプ



前列、左が著者

リングを行い、両湖のプランクトン組成とヒメマスの食性を調べている。と書きますと、私を知らない人は『この人は、水産技術センターに何年も勤務している人かな?』、私を知っている人は『こいつは、こんな所でこんなことしていたのか!』と思っているかと思う。

ここで私の職歴を簡単に紹介すると、大学卒業後、畜産・養魚飼料を製造販売している大洋飼料株式会社(昭和六一年四月入社、平成四年五月退社、約一年のプランクの後平成五年四月より水産技術センターに勤務、忍野支所に配属、現在に至っている)。

大洋飼料(株)時代は、主に静岡と愛知で養鰻飼料の営業を六年間行った。大洋飼料(株)時代の経験や人間関係は、大学卒業後の未熟な自分にとって厳しい試練であり、良い体験で、今の職場や業務にも大きく役立っている。しかし、その反対に今の業務を通して、この時代を反省することも多い。この時代の養鰻飼料の営業は、他の営業とやや異なり、アフターサービスとして養鰻技術や魚病といった養鰻指導を行っている。この指導について、そのころ自分のやっていたことが、養鰻業者にとっ

かにわかり難く曖昧であったか、今になって反省している。養魚にとって簡単な日常管理が、いかに大事か、養殖業とは、何かが起きてからでは済まない業種であることが、今の業務を通して身を持って理解した。

また、日常生活においても反省するところ見直すところも多い。大洋飼料(株)時代は、週四日から五日は出張で特約店やユーザーを回る時間が多く、家で過ごす時間が少なかった。このため、業務が日常生活みたいなところが、自分や業務を違う面から見直すことが出来なかった。この反省から、今の職場では、極力違う面から業務を見直し、業務の中から趣味を見つけ出し日常生活に生かす。また、日常生活の趣味を業務や職場に生かす様にしている。

話を職場に戻しますが、敷島の本所では、富士五湖のワカサギの資源調査やアユの種苗生産の最盛期を迎えている。支所では、九月から一二月に採卵した卵がふ化を迎えている。そして、私も水産技術センターに勤務して三年目を迎える。

サッカー部の近況報告

水産学部4年 芝本 正樹

世界でもっとも人気の高いスポーツであるサッカー。その魅力は、なんととっても、広いグラウンドを二人の選手が泥まみれになりながら、一つのボールを追ってほとんど休みなしに走りまわるところです。その中に、激しいボールの奪い合いもあれば、体のぶつかりあいもあります。タックルで空中をとぶこともめずらしくありません。

こういったプレーをつづける中で選手は、自然に苦しさに耐える克己心、どんなときもあきらめないねば



り、ピンチに動じない精神力、体力的には長時間の運動をのり切れる持久力、ものごとの集中力などが養われてきます。そして、さらに大切なことは、仲間同士で助け合う協調性が育つということです。こういったそれぞれの力を養い、少しでもそれに近づこうと我々は、日々努力し、部活動を行っています。

さて、我々、北里大学水産学部体育会サッカー部は、昨年度、部員総数二一名で活動を行ってきました。サッカー部としては、他の大学と比べ、決して多くはありませんが、我が北里大学水産学部体育会サッカー部の持ち前のチームワークで、そのハンディをおぎなってきました。また、練習試合を行うにしても、ここ三陸では、近くに他大学がないため、地元の人や、高校にお願ひして、練習試合を行っています。こういった条件で我々は、週四回、山村グラウンドをお借りして練習を行っています。

三年前、我々の正式名は、北里大

学水産学部体育会サッカー愛好会でしたが、先輩方の努力の結果、二年前に同好会、昨年は念願の北里大学水産学部体育会サッカー部に昇格しました。そして名前だけでなく、それぞれの大会もそれに見合う好成績を残すことができました。例えば、三年前では、東北地区大学サッカーリーグ二部、Bブロックにおいて、三位、二年前では、岩手県サッカー選手権三位、全日本サッカー選手権岩手県予選でベスト8の成績を残しましたが、初戦からケガ人が多数で、思い通りのサッカーができません、余り良い成績を残すことができませんでした。この反省するべき点を本年度にいかし、後輩と共に頑張っていきたいと思えます。

最後に、我々、サッカー部だけに限ったことではありませんが、相模原、十和田とも交流を深めるため、毎年、五月に三部対抗戦を行っています。離れてそれぞれにサッカーをしています。ですが、この日は、みんな同じグラウンドを楽しく走りまわっています。やはりサッカーの魅力は何となく自分にとっては、残り一年ですがチームワークを忘れずに頑張っていきたいと思えます。

十六年ぶりの崎浜

3 A 和田 光

一九七八（昭和五三）年春（三期）に卒業した友人達と共に昨年夏、七月二十九日（金）〜三十一日（日）の二泊三日で、一六年前に水産学部を卒業以来久しぶりに崎浜を訪問しました。

キー・ステーション的な存在である北海道の高橋伸幸君と近藤学君の骨折りで、ここ数年相談をしながら延び延びになっていた計画が実現したもので、その後、私も庶務係として協力させてもらうことになりました。



た。

宿や訪問先を決めていく過程で、まったく偶然なことに今回、参加者の栗田将夫君の学生時代の下宿先が一泊目の崎浜の宿で、そこでは同じく参加者の新保太平君が来るたびにオニギリをごちそうになっていたというようなエピソードなども出てきました。よくおなががすぎました。

七月二十九日（金）は、崎浜の「あずま荘」に集合しました。第一日目の夜は、再会の宴です。すばらしい三陸の海の幸尽くしの料理を前に、それぞれの体型の変化から始まって、思い出話の山です。学生時代以上に恰幅のよくなった（よくなり過ぎた？）下瀬真一君、最も知的で研究者らしく（？）学生時代と変わらぬスマートな佐々木喜代志君、往年（！）の色の白の鉢道マンといった鈴木潤一君など。都合で参加できなかった室蘭の松島邦彦君へ電話をいたしました。そして、漁業、流通、高級魚類の生産研究、教育関係など各人の仕事の話題や情報の交流など、

夜遅くまで話に花が咲きました。

二日目七月三十日（土）は、朝食後しばらく自由時間をとることにになりました。一六年も過ぎるとやはり色々なことがあるものです。ご不幸のあった下宿先にお参りに行ったり、事情で会えなかった所には伝言したり、中には未払いの下宿代を払いに行ったり、朝から再会記念に一杯ごちそうになったりと、さまざまな自由時間でした。

そしてそれが終わるとなつかしい大学の訪問です。久しぶりとは言っても、水産学部創期の思い出もあり、女性職員の方々も私たちとほとんど同世代で、格別の思いがあります。一步校舎内に入り受付に寄ると、なつかしくてすぐに大きな声を掛ける者がいて、受付の向こうからもすぐに返事があり感激の対面でした。続いて階上の研究室にお邪魔し、環境生態の井田先生、病理の小林先生、厚田先生と親しくお話をさせて頂きました。先生方もお変わりなくお元気そう、母校を持つことのうれしさをつくづくと感じたひとときでした。

再び受付に戻り職員の方々との記念写真を撮った後、新しくできた大きな学生食堂で昼食を食べました。女

子学生がずいぶん多く、華やかな雰囲気、圧倒されました。昨今景気が思わしくなく就職がたいへんだと聞きましたが、後輩達の活躍を祈っています。

午後は、佐々木喜代志君の手をわずらわし、（株）冷水性高級魚養殖技術研究所サンロックを見学させて頂きました。大変有意義なものでした。岩手県水産試験場は土曜日ということで中には入れず残念でした。

夜は、大船渡市のホテルに宿を取り、たまに三陸峠を越え懐が暖かいとみんなで行ったなつかしい鮎屋「勇駒」にでかけました。ここでも、ご主人や奥さん、跡取りの息子さんと思い出話に花が咲き、名刺を進呈したり湯飲みを頂いたりと楽しいひとときを過ごすことができました。

二泊三日も十六年ぶりの思い出や近況など積もる話を飲みながら交流するには、あつと言う間の時間です。こちらの連絡が遅れたり、仕事などの都合で参加できなかったみなさんともまたいつか機会があれば是非会いたいと思います。幸い、今回の参加者はすべて次回を望まれているようですし、さらに心強いことは、今回骨折って頂いた高橋伸幸君さらには近藤学君から次回に向けて積極的

に計画を進めていただけるとの心強い言葉を頂いています。近い内に再び会えることを楽しみにしています。終わりになりましたが、大学訪問の折りにはまるで学生時代のように甘えてご都合をお聞きすることなく

第二十二回漁火祭

昨年(一九九〇年)の十月十五、十六日の両日に第二十二回漁火祭が行われました。幸い、初日、二回目とも天候は大き



お邪魔したにも関わらず、暖かく貴重な時間を割いて頂きました。井田先生、小林先生、厚田先生にこの場をお借りしまして心から厚くお礼申し上げます。

漁火祭実行委員長 大隅光悟朗

く崩れることなく、また大勢の方々が出来ました。この第二十二回漁火祭が今まで以上のものになるように準備段階ではまさに試行錯誤の連続でした。その中の大きな課題として「どのよう到来場者を増やし、また楽しんでもらうか」がありました。この課題を解決するため、広報活動に力を入れ、また企画では芸能人の招待などと準備を進めて行きました。予算の都合上、地元の企業や商店などに多大な御協力を頂きました。

前年度の漁火祭でよかったもの今年度も取り入れ、かつ今年度の独立性も出したい。そんな気持ちから地元の小学校の生徒を招待する企画とチャリティーバザーなどの企画を前年度の引き続きとして残し、新し

くは、研究室の展示・発表や地元の方々によるマジックショーなどを取り入れました。前述した地元の小学生の招待は、この三陸という土地から、漁火祭を通じて地元の人々と交流を持つたい、交流を持ちきつかけを作りたいという思いから生まれた企画でした。

初日の十月十五日はこの小学生企画を筆頭に、各企画、展示、模擬店などを催し、学外では、漁火祭名物大漁踊りが行われました。

この日招待した小学生は、皆、本当に楽しんでくれて、二日目には開始時間前に訪れる子供もいました。

二日目の十月十六日には、メイン企画としてお笑いタレントのキャンペーンを招いてショーや観客を交えてのゲームが行われました。予想以上の来場者が見られ、販売予定外のチケットまで売れてしまいました。

その他にマジックショーや軽音ライブ、各企画など色々催し物を用意しました。企画の中には、ハッピーカードなど男女の出会いのあるものもあり、三陸ではめずらしい盛り上りを見せました。

両日楽しめるものも数多くあり、模擬店は、一カ所に集めたことで、相乗効果を生み、かなりの盛り上り

で売り切れになる店が続出しました。チャリティーバザーは特に大盛況で、初日、二日目の売上金の合計は十万円を超えました。売上金は全額、三陸町福祉協議会に寄付させていただきました。

後夜祭でも、盛り上がりは大変なもので、恒例になっているMrレディーも個性あふれる「美女」が多数参加し、また軽音ライブでは、まさに祭りのクライマックスをビリビリと感ずるものでした。

第二十二回漁火祭は、前年よりもっと盛大に、もっと人々の心に残るものに……を目指してきましたが、それには大変な努力とそして、周りの理解が必要だと感じました。そして、この漁火祭には学生の力だけではなく地元の方々に支援されて成り立っているものだということも忘れてはならないことだと思いました。この小さな町、三陸町で行う「漁火祭」は他の大学の学園祭とは一味も二味も違った学園祭であると同時に、そのことに誇りをもって、実行委員をやってきました。

この漁火祭の開催にあたり、多くの方々に御協力頂きましたことを感謝し、深く御礼申し上げます。

三陸ツアーのご案内

Home Coming Day in SANRIKU

今年、第1期生が水産学部を卒業してから20年目の年に当たります。この記念の年に三水会では、三陸校舎で記念イベントを開催いたします。Home Coming Day と名づけ、学生時代に戻って教職員の方々と楽しい2日間を過ごしたいとおもいます。この機会に是非ご家族とご一緒に、私たちの第二の故郷「三陸」で再会しましょう。

日 程 平成7年7月29日(土)～30日(日)
 募集人数 約200名(三水会で宿泊先確保可能人数)
 宿泊先 遊 You 亭、佐々木旅館他(三陸町越喜来)
 参加費 大人 1万円、子供(小学生以上)5千円(宿泊、パーティー代を含む)

★お申込みは、同封の葉書かFAXで6月末までに三水会事務局までお願いします。
 申し込まれた方には6月末頃に宿泊先等詳しいご案内をお送りします。
 <三水事務局> 〒246 横浜市瀬谷区瀬谷5-22-1 TEL・FAX 045-303-3135

《主な内容》

日 程	卒 業 生	ご 家 族
7月29日(土)		
12:00	新幹線利用の方はJR水沢江刺駅集合→バスで大学へ(昼食は各自で)	
14:00	水産学部へバス着(自家用車利用の方は直接大学に集合) スケジュール等の説明	
14:30	大学校内見学(4～5班に別かれて)	
15:30	<マリンホール大講義室> 学部長挨拶、児玉先生、外山事務長の講演	<マリンホール中講義室> 井田先生による「子供のための水産学公開セミナー」(ビデオ、スライド等)
17:00	パーティー開始(マリンホールで先生方、下宿の大家さん等を交えた立食パーティー)	
18:00	(宿泊先へバスの早便出発)	
19:00	パーティー終了(バスで宿泊先へ)	
20:00	二次会	子供 花火大会他
7月30日(日)		
8:00	朝食(各自の宿泊先で) 自由行動(海へ、山へ、大学研究室、買物、等々)	
12:00	遊 You 亭でバーベキュー	
14:00	水沢江刺駅に向けてバス出発(自家用車利用の方は解散)	

阪神大震災の対応について

去る1月17日に発生した阪神大震災は、神戸、淡路島を中心として大きな被害を与え、犠牲者も5千人を超える等、戦後最大の自然災害となりました。三水会の会員は兵庫県に約70名の方が在任しており、被害状況等を調査しておりますが、現在までのところ亡くなられた方の情報は入っておりません。三水会としては、まず日本赤十字社を通じて20万円の義援金を送りましたが、会員の方々の被害状況等を把握した上で今後の対応を検討して参りたいと思います。情報等をお持ちの方は三水会事務局までご連絡ください。